

## 農山村地域の後継者問題と地域振興の課題

広島県比婆郡高野町の子ども意識調査から

伊藤勝久<sup>1</sup>・渡辺絵美<sup>2</sup>

### The Problems of Successor and Regional Promotion in the Rural Area

The Case Study from the Viewpoint Children's Opinion of Takano-cho, Hiroshima Prefecture

Katsuhisa ITO<sup>1</sup>, Emi WATANABE<sup>2</sup>

**Abstract** We discuss about the promotion problems which are pointed out from rural children's opinion. In the almost rural towns and villages, depopulation problem has reached severe stage, so-called "natural decrease of the population." The flowing-out of population became slowly, but it does not mean that flowing-out have stopped. In such situation, the behaviors and the opinions of children who become leaders of rural area are very important topics. But depression of agriculture and other rural industry made children push out to metropolis. In addition, the direction of school education and parents' expectation help the children's flowing-out. To promote the rural area, it will be important policy that to prepare conditions for young people's settlement. Which are both physical conditions for income opportunity and mental condition of home-place, that children would like to come back there, even if once they go out. This is the way to promote and maintain the rural area as a sustainable community.

Key words: children; opinion; rural promotion; successor; depopulation

## はじめに

農山村地域<sup>1</sup>では、過疎化の動向は一向に止まらない。かつてのような人口の急激な転出による減少（社会減）はある程度終息したものの、人口の自然減が進んでいる。しかし社会減はなくなったわけではなく、現在も続いている。現代における社会減はおおよそ二つのタイプに分けられる。一つは30～40歳代の世帯が、その子どもの高校進学などを契機に一家で他出するものである<sup>2</sup>。もう一つは、地元の中学校を終え、高校に進学する子どもたちである。両者ともに地元で高校等がなく、自宅からは通

学出来ないという事情に規定されている。

ところで現在、各地の農山村地域の町村では「町村おこし」に対して盛んに努力がなされている。そのことは地域を活性化するための有効な方法である。そして、「町村おこし」の主役は、地域における若手層で、20歳代の若者もいるが、その多くは30～40歳代の世帯主または後継者層である。そして、「町村おこし」がある程度軌道に乗り始め、地域内部で様々な活動が生まれてきたとき、この活動はどのぐらいの期間持続するであろうか、という疑問が出てくる。もちろん、社会や経済の変化と共に、農山村地域の活動もその内容を徐々に変えながら状況に合わせて行く必要はあろう。しかし、変化しながらではあれ活動自体が持続して行くためには、活動の新たな担い手が次々に補充されなければならない。現在のリーダー層がいつまでもその活動に携わることが出来ないのは自明である。

従って本論では、地域の活動が持続的に展開されるための基本的条件としての「農山村地域の将来の担い手」に関して考察することとしたい。そこで現在地元で小・中学校に通う子どもたちの考えや意向を調査し、それら

<sup>1</sup> : 島根大学生物資源科学部地域開発科学科

<sup>2</sup> : 島根大学生物資源科学部地域開発科学科平成13年度卒業生

<sup>1</sup> : Dept. of Regional Development, Fac. of Life and Envir. Sci., Shimane Univ.

<sup>2</sup> : Graduate of the Dept. of Regional Development, in the class of 2001

は何に起因するのか、どのような問題があり、どのような解決の方向が考えられるかを検討することを課題としたい。

## I. 子ども問題と本研究の位置付け

### 1. 子ども問題

現在子ども問題として話題になる事象は、少子化といじめである。社会の成熟と共に出生率が低下し、日本全体として人口は今後減少局面にはいり高齢化が一層進む。このことは都市も農山村地域も同様である。その中で現代の閉塞状況から特徴的な現象が生まれており、それがいじめであるということが出来る。これも程度の差はあれ、都市部でも農山村部でも同様に見られると考えられる。

ここで問題にするのは、人口変動の一つとしての少子化を前提にしながら、農山村地域の子どもたちは外部からはプル（pull）の要因が働き、その上内部からもプッシュ（push）の要因が働いているという現実である。

プル要因はテレビ、コンピュータなど情報機器の普及により、農山村にない外部（都市部）の社会・生活が伝えられ、刷り込まれることと、諸格差が一定程度ひらいたままの状態であることによるものであろう。

他方プッシュ要因は、農山村地域においてはいわば悪循環構造を形成していると考えられる。直接的なプッシュ要因は、農山村地域における農林業をはじめとする産業の所得水準の低さ<sup>3</sup>と職業選択の幅の少なさ、不況による労働力吸収力の少なさである。そしてこのことが、親世代が子どもに対して、非農林業さらにホワイトカラーとして「一流」の会社等や職種への就労に過度に期待することになる。またこれを後押しするのが、一般的に行われている学力重視の学校教育である。しかし、このような学校教育の方針は多くの親が認め、むしろもっと学力をつけさせるような教育を望んでいるという事実もある。

さらに、人口減少によって公共サービスが地域から撤退しているという事実もある。小・中学校は周辺地域からなくなり町村の中央部に統合されることが多く、医療・福祉サービスも効率化のため集中される。また公共交通サービスも採算問題から撤退している。このような公共サービスの恩恵も少なく、過疎化によって同級生の数も少なくなっている農山村においては、子どもたちは幼い頃から無意識のうちに不便を強いられていると言える。

これらの諸要因が複合して、現在のプッシュ要因を形成していると考えられる。

地域の活性化を真に考えるのであれば、地域の将来を担う子どもに注目するべきである。地域の後継者、担い手がいなければ、折角の地域振興活動は後が続かない。就職や進学上、一旦は地域外にでることは今の農山村の現状からみれば仕方がない。課題は、農山村も都市もそれぞれの長所・短所を知った上で、それでもまた地域に戻ろうとする決定が行える条件をどれだけ与えられるか、あるいは新たに整えられるかということである。子どもたちが地域の担い手になることで、世代から世代へと受け継がれる、持続性のある地域振興がはじめて可能になるのである。

『今の学校では、農山村の外に出ず教育をしているのではないか』という、ある農家の指摘からも、今のままでは好ましい世代の循環ができておらず、ましてや定住促進にはつながっていないように思える。こういった状況を改善するには、学校や家庭はもちろん、地域ぐるみで子どもに対してどのような教育や育て方をしていけばよいのか、また育成する側の意識の在り方はどうあるべきかを見出すことが重要である。

### 2. 調査の目的と方法

農山村地域の子ども問題に取り組むに当たって、次の点を留意しながら、調査を実施した。

まず農山村に住む子どもが、農業に対して、あるいは地域に対してどう感じているか、また、進学や近い将来をどう考えているかという意識の現状を明らかにし、親の意見や学校の方針と比較することで、親や地域との考え方のずれが指摘できると考えられる。そのことから、持続可能な地域づくりのための条件形成について検討する。

そこで、調査項目として次の諸点を設定した。すなわち、①家族構成とくに同居している世代数により地域や家の伝統の継承などにどのような影響があるか。②農業に対する関心や将来の就農に対する意向。これは農業への関心の有無が他の項目にどのような影響があるかを見ようとした。③町や地元集落に対する長所・短所の評価。これから、地元地域をどの程度客観視できるか、逆に思い入れを持っているかを見ようとした。④学校生活や日常生活及び将来の進路に関する意向。この項目は農山村地域の子どもたちの日常を見る事から生活の特徴や問題点を検討しようというものである。

さらに同時に保護者に対しても同様な調査を行い、親子間での意見の異同を見ようとしている。

実際の方法としては、高野町内にある4つの小学校の

5,6年生と高野中学校全学年を対象にアンケート調査を行った。また高野中学校の保護者にもアンケート調査を行った（アンケートの概要については後述する）。

## Ⅱ．調査地域の概況

### 1．高野町の概況

調査地域として選択したのは、広島県比婆郡高野町である。高野町は中国山地のほぼ中央に位置し、広島県の中でも広島市へは最も時間がかかる地域である。高度経済成長期には相当数の人口が減少したが、現在は高原という立地条件を活かし、農業面では高原野菜やリング栽培が盛んになっているが、その外は他の過疎地域と同様に土建業に依存することが多い。また、観光面にも力をいれ、山地を利用した各種の施設やイベントも近年増加している。とくに、地域の青年層が中心になり、公式雪合戦やパラグライダー大会を行っている。季節ごとの祭りや集落内での寄り合いなどの住民主体型の行事や会合が比較的多く、地域内外との交流の場が多いといえる。このように比較的活力のある農山村に住む若者・子どもたちでさえ都市部への流出は止むところを知らない。

高野町の人口は昭和20年代の約5600人をピークに年々減少している。特に、昭和35年頃から50年頃にかけては急激に減少し、平成12年では約2400人になっている。

世帯数には大きな変化はないが、一戸あたりの世帯人員数はピーク時の昭和22年では5.4人だったものが、平成12年には3.3人になっている。

人口変動を社会増減と自然増減に分けてみたものが、図-1である。昭和40年代は社会減（転出数）が社会増（転入数）をはるかに上回っていたが、50年代になるとその格差が徐々に狭まってきている。自然増減ではかつては自然増（出生数）が自然減（死亡数）より僅かに上回っていたが、昭和60年ごろからそれが逆転し死亡数が相当上回るようになってきている。

年齢構成も大きく変化し、図-2によって、年齢階層別人口の推移をみると、昭和25年には若年齢層が非常に多く、

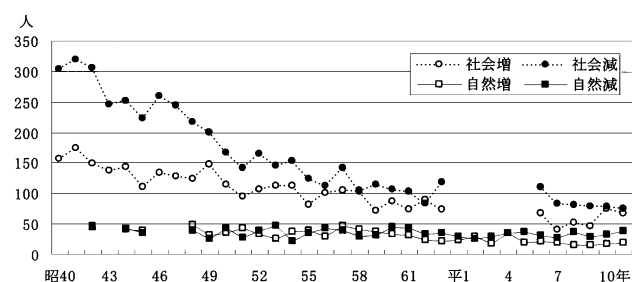


図-1 高野町における人口変動の推移

青年期になっても（他出により）減少することはなかったが、昭和30～40年、さらには50年の年齢構成をみると、20～30歳代が著しく少なくなっている。そのために、その世代の子どもたち以降の世代がさらに少なくなっている。昭和30年に比べて平成7年には、9歳以下の世代は1400人から240人と約6分の1に減少し、10～19歳の世代も1200人から270人と約4分の1に減少している。この傾向が続くと、より少ない世代の子どもたちは一層減少し、地域としての担い手がますます存在しなくなるという問題が発生している<sup>4</sup>。

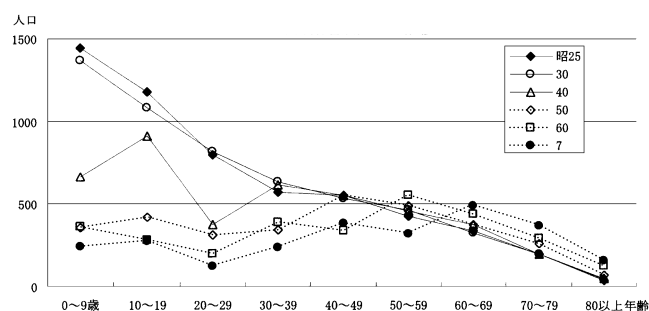


図-2 年齢階層別人口の推移

### 2．町内小・中学校の状況

次に町内の小・中学校についてみると、現在小学校が4校（新市小、下高野山小、湯川小及び和南原小）あり、このうち下高野山小は人口が減少した高暮小と合併したが、いずれも明治初期の創立である。

平成17年4月に広島県の86市町村が17市町村に合併される予定であるが、それに伴い、高野町でも平成15年に4つの小学校が新市小学校に統合することが決定している。統合すれば、各学年とも20人前後になり、合せて6学級が編成できることになる。

小学校の児童数の推移は図-3に示している。ここではデータの制約で3小学校のみであるが、児童数のピークは昭和20年代初めと30年代中頃にあったことが読み取れる。いずれの小学校もピーク時に比べて、現在の児童数は5分の1から8分の1に減少している。殆どの学校で一学年が10人未満になっており、多くが複式学級で運営

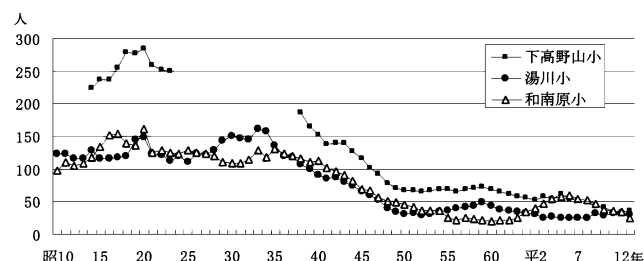


図-3 高野町内3小学校の児童数の推移

されている。

中学校は町内1校の高野中学校で、生徒数は現在79人、各学年1クラスである。

町内の各小・中学校ともに多様な活動を授業などに取り入れ、地域の農林業・伝統的生業（リンゴ生産、炭焼き、地域芸能など）の理解や現代社会・行政や国際状況（模擬議会）の理解に努めている。

### Ⅲ．調査結果の分析と検討

#### 1．アンケート調査の概要

町内の4小学校（5,6年生）と中学校（全学年）の児童、生徒を対象にアンケート調査を行った。調査方法は、予め教育委員会を通じて各学校長と調査内容について検討を依頼し、その後各学校に対してクラスごとに担任を通じて配布・回収を依頼した。なおアンケート質問項目は小学生と中学生では、漢字での表記等を除けば殆ど同じである。実施は2001年9~10月である。対象者の児童・生徒は下高野山小16人、新市小14人、湯川小14人、和南原小10人、高野中79人、合計133人に配布し、殆どから回収できた。有効回答数は127であった。

表-1 児童・生徒及び保護者の概要

|       |      |    |     |    |    |       |    |     |    |    |       |    |    |    |
|-------|------|----|-----|----|----|-------|----|-----|----|----|-------|----|----|----|
| 児童・生徒 | 和南原小 |    | 湯川小 |    |    | 下高野山小 |    | 新市小 |    |    | 高野中学校 |    |    |    |
|       | 小5   | 小6 | 小5  | 小6 | 不明 | 小5    | 小6 | 小5  | 小6 | 不明 | 中1    | 中2 | 中3 | 不明 |
| 男     | 2    | 5  | 1   | 3  | 2  | 3     | 3  | 4   | 3  |    | 10    | 10 | 16 | 4  |
| 女     | 1    | 2  | 3   | 3  | 1  | 4     | 6  | 1   | 3  |    | 7     | 8  | 8  | 5  |
| 不明    |      |    |     |    | 1  |       |    |     |    | 1  |       |    |    | 7  |
| 総計    | 3    | 7  | 4   | 6  | 4  | 7     | 9  | 5   | 6  | 1  | 17    | 18 | 24 | 16 |

|     |     |     |     |     |    |
|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 保護者 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 総計 |
| 父親  |     | 2   | 6   | 1   | 9  |
| 母親  | 1   | 2   | 10  |     | 13 |
| 総計  | 1   | 4   | 16  | 1   | 22 |

また保護者に関しては、高野中学校開催の社会教育講演会に参加した保護者が対象である。調査方法は、会場入り口で手渡しし、講演会終了時に記入したものの提出を依頼した。その結果、有効回答数は22であった。

調査対象の児童生徒及び保護者の概要は表-1の通りである。

#### 2．児童・生徒の家族状況と保護者の職業

調査対象になった児童・生徒の家族状況については、同居する世代数でみると、127人の対象者のうち、最も多いのが3世代世帯で97人（76%）、次いで4世代世帯18人（14%）、さらに2世代世帯（核家族）

8人（6%）である。同時に家族人員数をみると、3世代世帯4~8人、4世代世帯で7~9人の規模である。全体でみると、7人家族が最も多く（49人、39%）、次いで6人家族、5人家族となっており、概して大家族が多いといえる。

保護者の職業では、専業農家（8人、6%）、兼業農家（92人、72%）、非農家（14人、11%）であり、非農家では、公務（5人）、サラリーマン（4人）、自営業（4人）である。また兼業農家の内訳も公務・サラリーマンが最も多い。逆にみると、農山村地域で定住し、子供を育てることの出来る世帯とは、兼業農家であるといっても良いであろう。兼業農家の経済的特徴としては、収入手段の多様化により専業農家よりも経済的安定性が高いことが上げられ、それにより子育ても可能になると言えよう。

次に働く保護者を見ての意見が表-2である。これによると、保護者を「頑張っている」（76人、60%）、「尊敬できる」（33人、26%）、「人の役に立っている」（31人、24%）と認識している子どもが多く、保護者が働く姿に対して肯定的評価をしている。子どもの学年進行を加味すると「尊敬できる」とする者の比率は徐々に上がっているが、他方「何も思わない」者の比率も上がっている。また「人の役に立っている」、「親のような大人になりたい」とする者の比率は下がっている。これらのことから、上級になるにつれ、保護者の職業を客観的に分析できるようになる一方で、冷めた見方をする子どもも増えていることを示している。

#### 3．農業・就農・農業者に対する興味・意向・関心

農業に対して子どもたちはどのような興味をもっているのだろうか。

表-3は学年別に農業へ興味をみたものである。農業への興味について「かなり興味がある」、「少し興味がある」とするものは学年が上がるにつれて増加している（両者を合わせて21%（小5）が41%（中3）に）。逆に「あまり興味がない」、「興味がない」とするものは減少している（両者を合わせて74%（小5）が51%（中3）に）。こ

表-2 働く保護者を見ての感想（学年別）

(複数回答, 実数, %)

| 学年 | 働く保護者を見ての感想 |       |       |        |           |        |              |          |        |        |       | 総計  |
|----|-------------|-------|-------|--------|-----------|--------|--------------|----------|--------|--------|-------|-----|
|    | 頑張っている      | かっこいい | かっこ悪い | 尊敬できる  | 人の役に立っている | やめて欲しい | 親のような大人になりたい | 生き生きしている | つらそう   | 何も思わない | その他   |     |
| 小5 | 13 68%      | 3 16% |       | 4 21%  | 7 37%     |        | 3 16%        | 3 16%    | 4 21%  |        | 1 5%  | 19  |
| 小6 | 15 54%      | 3 11% |       | 6 21%  | 5 18%     |        | 4 14%        | 4 14%    | 6 21%  | 3 11%  | 3 11% | 28  |
| 中1 | 10 59%      |       |       | 4 24%  | 6 35%     |        | 3 18%        | 1 6%     | 2 12%  | 2 12%  |       | 17  |
| 中2 | 8 44%       | 2 11% | 2 11% | 5 28%  | 3 17%     | 1 6%   | 2 11%        | 4 22%    | 5 28%  | 5 28%  | 3 17% | 18  |
| 中3 | 15 63%      |       |       | 11 46% | 6 25%     |        | 3 13%        | 1 4%     | 5 21%  | 2 8%   | 1 4%  | 24  |
| 不明 | 15 71%      | 1 5%  |       | 3 14%  | 4 19%     | 1 5%   | 1 5%         | 2 10%    | 3 14%  | 4 19%  |       | 21  |
| 総計 | 76 60%      | 9 7%  | 2 2%  | 33 26% | 31 24%    | 2 2%   | 16 13%       | 11 9%    | 25 20% | 16 13% | 8 6%  | 127 |

のことから、学年が上がるにつれて農業の意味・重要性、地域における位置付けなどをより意識するようにはなっていないといえる。

但しこのことは、将来の就農の意向と必ずしも連動しているものではなさそうである。次に学年進行やその興味の程度によって就農に対するどのような意向があるかをみた。表-4は、将来の就農の意向<sup>5</sup>についてその理由とともに尋ねた結果である。将来就農を考えている者は、「やってみたい全体」でみると、学年進行とともに減少し(32%(小5)が21%(中3)に)、就農を希望しないもの「やりたくない全体」は学年進行とともに増加している(68%(小5)が71%(中3)に)傾向が読み取れる。その理由は、「やってみたい」者では「なんとなく」、「その

他の理由で」などと明確でないが、「やりたくない」者では「面白くなさそう」、「家が農家でない」、「その他の理由で」となっており、「面白くなさそう」を理由にあげたものは学年が上がるにつれて明らかに増加傾向にある。なお「その他の理由」について具体的に述べているものは殆どいないので分からないが、子どもたちの目には農業に就くことがどのように映っているのかを調べる必要がある。

また、農業への興味の程度別に将来の就農の意向を調べると、「かなり興味がある」としたものの全員が「やってみたい」としているが、「少し興味がある」者の約7割は「やりたくない」としている。さらに「興味がない」、「あまり興味がない」とした者の約8割は「やりたくない」と回答し、残り2割弱が「やってみたい」としている。また「農業に興味がある」とした者で「やってみたい」と答えた時の理由は、「面白そう」、「家が農家だから」、「何となく」などの理由が上げられている。

農業者への感想を学年別にみたものが表-5である。全体として多い回答は、「つらそう」(45%)、「食べ物を作っているのが偉い」<sup>6</sup>(29%)、「尊敬する」(20%)などである。多くの子どもたちは、農業者に対して肯定的評価を

しているが、その労働強度や生産所得の低さなどの内実も地元であるからこそよく知っているといえる。これを学年別に見ると、「やってみたい」の回答は各学年を通じて大きな変化がないが、「やりたくない」の回答は学年が上がるにつれて減少傾向が見られる。また「尊敬する」、「食べ物を作っているのが偉い」、「つらそう」の回答は学年が上がるにつれて増加している。これらのことから、学年が上がるにつれて農業者に対する評価も身近に存在し客観的価値

表-3 農業への興味(学年別)

(実数, %)

| 学年 | 農業への興味   |         |          |        |      | 総計       |
|----|----------|---------|----------|--------|------|----------|
|    | かなり興味がある | 少し興味がある | あまり興味はない | 興味がない  | 不明   |          |
| 小5 | 1 5%     | 3 16%   | 8 42%    | 6 32%  | 1 5% | 19 100%  |
| 小6 | 1 4%     | 4 14%   | 15 54%   | 7 25%  | 1 4% | 28 100%  |
| 中1 |          | 3 18%   | 11 65%   | 3 18%  |      | 17 100%  |
| 中2 | 1 6%     | 4 22%   | 8 44%    | 5 28%  |      | 18 100%  |
| 中3 | 2 8%     | 8 33%   | 9 38%    | 3 13%  | 2 8% | 24 100%  |
| 不明 |          | 8 38%   | 7 33%    | 6 29%  |      | 21 100%  |
| 総計 | 5 4%     | 30 24%  | 58 46%   | 30 24% | 4 3% | 127 100% |

表-4 将来の就農に関する意識(学年別)

(実数, %)

| 学年 | 将来の就農に関して     |               |            |                 |                |               |              |                  |                |                 |               | 総計     |              |          |
|----|---------------|---------------|------------|-----------------|----------------|---------------|--------------|------------------|----------------|-----------------|---------------|--------|--------------|----------|
|    | 面白そうだからやってみたい | 家が農家だからやってみたい | 何となくやってみたい | 食べ物が大切だからやってみたい | 自然が好きだからやってみたい | その他の理由でやってみたい | やってみたい全体(小計) | 面白くなさそうだからやりたくない | しんどそうだからやりたくない | 家が農家でないからやりたくない | その他の理由でやりたくない |        | やりたくない全体(小計) | 無回答      |
| 小5 | 1 5%          | 1 5%          |            | 1 5%            |                | 3 16%         | 6 32%        | 4 21%            | 1 5%           | 2 11%           | 6 32%         | 13 68% |              | 19 100%  |
| 小6 | 2 7%          |               | 1 4%       |                 |                | 2 7%          | 5 18%        | 8 29%            |                | 5 18%           | 10 36%        | 23 82% |              | 28 100%  |
| 中1 |               | 1 6%          | 2 12%      |                 |                |               | 3 18%        | 4 24%            | 1 6%           | 2 12%           | 6 35%         | 13 76% | 1 6%         | 17 100%  |
| 中2 |               |               | 2 11%      |                 |                | 3 17%         | 5 28%        | 6 33%            |                | 2 11%           | 5 28%         | 13 72% |              | 18 100%  |
| 中3 | 1 4%          | 2 8%          | 1 4%       |                 | 1 4%           |               | 5 21%        | 10 42%           | 1 4%           | 3 13%           | 3 13%         | 17 71% | 2 8%         | 24 100%  |
| 不明 |               |               | 2 10%      |                 |                | 1 5%          | 3 14%        | 4 19%            | 1 5%           | 5 24%           | 6 29%         | 16 76% | 1 5%         | 21 100%  |
| 総計 | 4 3%          | 4 3%          | 8 6%       | 1 1%            | 1 1%           | 9 7%          | 27 21%       | 36 28%           | 4 3%           | 19 15%          | 36 28%        | 95 75% | 4 3%         | 127 100% |

表-5 農業者への感想(学年別)

(複数回答, 実数, %)

| 学年 | 農業者への感想   |           |        |       |       |        |         |               |      |        | 総回答者   |     |
|----|-----------|-----------|--------|-------|-------|--------|---------|---------------|------|--------|--------|-----|
|    | 自分もやってみたい | 自分はやりたくない | 尊敬する   | かつこいい | かつこ悪い | 面白そう   | つまらなさそう | 食べ物を作っているのが偉い | らくそう | つらそう   |        | その他 |
| 小5 | 2 11%     | 5 26%     | 3 16%  | 2 11% |       | 1 5%   | 2 11%   | 4 21%         |      | 7 37%  | 3 16%  | 19  |
| 小6 | 3 11%     | 2 7%      | 5 18%  | 2 7%  |       | 4 14%  | 1 4%    | 7 25%         |      | 13 46% | 4 14%  | 28  |
| 中1 | 1 6%      | 3 18%     | 4 24%  |       |       | 6 35%  | 1 6%    | 5 29%         |      | 8 47%  |        | 17  |
| 中2 | 2 11%     | 3 17%     | 4 22%  | 1 6%  |       | 3 17%  | 1 6%    | 9 50%         |      | 7 39%  | 3 17%  | 18  |
| 中3 | 4 17%     | 4 17%     | 7 29%  | 1 4%  |       | 1 4%   |         | 6 25%         |      | 13 54% | 2 8%   | 24  |
| 不明 | 1 5%      | 3 14%     | 3 14%  | 1 5%  |       | 1 5%   | 1 5%    | 6 29%         | 1 5% | 9 43%  | 2 10%  | 27  |
| 総計 | 13 10%    | 20 16%    | 26 20% | 7 6%  | 0 0%  | 16 13% | 6 5%    | 37 29%        | 1 1% | 57 45% | 14 11% | 127 |

表-6 農業者への感想評価の分析(学年別)

| 学年 | 農業者への感想       |                |         |                    |                     |                   |
|----|---------------|----------------|---------|--------------------|---------------------|-------------------|
|    | プラス評価の総回答数(a) | マイナス評価の総回答数(b) | 回答者数(c) | 一人当たりプラス評価数(d=a/c) | 一人当たりマイナス評価数(e=b/c) | 「プラス/マイナス」比率(d/e) |
| 小5 | 12            | 14             | 19      | 0.6                | 0.7                 | 0.9               |
| 小6 | 21            | 16             | 28      | 0.8                | 0.6                 | 1.3               |
| 中1 | 16            | 12             | 17      | 0.9                | 0.7                 | 1.3               |
| 中2 | 19            | 11             | 18      | 1.1                | 0.6                 | 1.7               |
| 中3 | 19            | 17             | 24      | 0.8                | 0.7                 | 1.1               |
| 不明 | 13            | 13             | 21      | 0.6                | 0.6                 | 1.0               |
| 総計 | 100           | 83             | 127     | 0.8                | 0.7                 | 1.2               |

判断が出来るようになってきているといえる。「自分はやりたくない」の回答が減少していることから、直ちに肯定的、積極的評価が高まった訳ではなく、その選択肢を選ばなかっただけであり、保留の表明ないし否定的に断言することを避けようとしたともとれる。

表-6は農業者への意見分布を分析したものである。農業者への否定的側面の指摘(選択)数は学年進行に関係なく一定割合であるが((e)の項目)、肯定的側面につい

ては増加している ((d) の項目) . つまり成長するにつれて概してより多くの肯定的側面が見えるようになってきているといえる (「プラス/マイナス」比率の項目) .

4 . 高野町および居住する集落に対する評価

高野町に関する子どもの評価をまとめたものが表 - 7 である . まず肯定的評価で学年進行とともに選択率が増加する項目は「静か」, 「やさしい人が多い」, 「人が親切」, 「生まれ育った所」などであり, 学年進行とともに減少する項目は「自然がたくさんある」である . 人的要素は成長するにつれて肯定的評価に加えられるといえるが, 自然的要素は必ずしもそうではないといえる . 否定的評価で学年進行とともに選択率が増加する項目は, 「遊ぶところが少ない」, 「交通の便が悪い」, 「店が少ない」, 「同級生が少ない」などの項目である . いわば利便性条件が多く回答されている . とくに「遊ぶところ」, 「店」などは中学生になると多く (7~8割もの) 子どもがそれらが少ないことを地域の嫌いな点として指摘している .

同様に, 自分の住む集落に関しての評価をまとめたものが表 - 8 である . まず特徴的なのは, 肯定的評価で学年

進行とともに選択率が減少する項目は, 「自然がたくさんある」, 「友達が近くに住んでいる」というものである . 他方「近所の人と仲が良い」は増加している . 次に, 否定的評価で学年進行とともに選択率が増加する項目は, 「遊ぶところが少ない」, 「友達の家が遠い」, 「店がない」などがあげられる . これらのことから, 集落に関しては, 町全体との評価とは異なる評価が見られる . とくに友達との関係であるが, 小学生のころは地縁をもとにした付き合い関係で近隣に友達がいることが肯定的評価の要因になっていたが, 中学生になると地縁よりも同一の部活動や趣味, 気の合う友達との付き合いに徐々に変化し, 狭い集落の範囲においては, ただでさえ子ども数も減少している現在では, 友達付き合いに支障が出てくるものが読み取れる . その他に「店」では, その選択比率は町全体よりも低い値であることから, もともと集落という範囲は子どもにとっての「店」(買物よりも友人との付き合いの場として) を期待したものではない . 但し, 近隣の人々との関係も徐々に深まっていくので, 地縁としての人的要素 (「近所の人と仲が良い」など) の肯定的評価は高まっている .

表 - 7 高野町に関する好き/嫌いの評価 (学年別)

(複数回答, 実数, %)

| 学年 | 高野町の好きなおところ/嫌いなおところ |                |         |             |              |                |         |               |           |                 |               |             |         |       |               |         |           |     | 総計 |
|----|---------------------|----------------|---------|-------------|--------------|----------------|---------|---------------|-----------|-----------------|---------------|-------------|---------|-------|---------------|---------|-----------|-----|----|
|    | 好き                  |                |         |             |              |                |         |               |           | 嫌い              |               |             |         |       |               |         |           |     |    |
|    | 自然がたくさんあるから好き       | 遊び場がたくさんあるから好き | 静かだから好き | 空気がきれいだから好き | やさしい人が多いから好き | 人が親切にしてくれるから好き | なんとなく好き | 生まれ育ったところから好き | その他の理由で好き | 遊ぶところが少ないところが嫌い | 交通の便が悪いところが嫌い | 店が少ないところが嫌い | 田舎だから嫌い | 自然が嫌い | 同級生が少ないところが嫌い | なんとなく嫌い | その他の理由で嫌い |     |    |
| 小5 | 17.89%              | 5.26%          | 4.21%   | 11.58%      | 4.21%        | 6.32%          | 1.5%    | 5.26%         | 1.5%      | 5.26%           | 1.5%          | 10.53%      | 2.11%   |       | 3.16%         |         |           | 19  |    |
| 小6 | 23.82%              | 1.4%           | 8.29%   | 14.50%      | 6.21%        | 7.25%          | 2.7%    | 6.21%         | 4.14%     | 8.29%           | 5.18%         | 22.79%      | 1.4%    | 1.4%  | 1.4%          | 1.4%    | 1.4%      | 28  |    |
| 中1 | 17.100%             | 3.18%          | 7.41%   | 12.71%      | 2.12%        | 5.29%          | 3.18%   | 2.12%         | 1.6%      | 8.44%           | 3.18%         | 15.88%      | 3.18%   |       | 4.24%         |         |           | 17  |    |
| 中2 | 15.83%              |                | 8.44%   | 9.50%       | 5.28%        | 7.39%          | 7.39%   | 5.28%         | 1.6%      | 8.44%           | 7.39%         | 12.67%      | 7.39%   |       | 2.11%         | 4.22%   | 2.11%     | 18  |    |
| 中3 | 18.75%              | 2.8%           | 9.38%   | 15.63%      | 6.25%        | 9.38%          | 2.8%    | 8.33%         | 1.4%      | 15.63%          | 7.29%         | 17.71%      | 5.21%   |       | 6.25%         |         |           | 24  |    |
| 不明 | 18.86%              |                | 8.38%   | 12.57%      | 4.19%        | 4.19%          | 5.24%   | 8.38%         | 2.10%     | 11.52%          | 5.24%         | 15.71%      | 3.14%   |       | 7.33%         | 2.10%   | 1.5%      | 21  |    |
| 総計 | 108.85%             | 11.9%          | 44.35%  | 73.57%      | 27.21%       | 38.30%         | 20.16%  | 34.27%        | 9.7%      | 53.42%          | 28.22%        | 91.72%      | 21.17%  | 1.1%  | 23.18%        | 7.6%    | 4.3%      | 127 |    |

表 - 8 自分の集落の好き/嫌いの評価 (学年別)

(複数回答, 実数, %)

| 学年 | 自分の集落の好きなおところ/嫌いなおところ |             |        |           |         |           |           |         |        |         | 総計  |
|----|-----------------------|-------------|--------|-----------|---------|-----------|-----------|---------|--------|---------|-----|
|    | 好き                    |             |        |           |         | 嫌い        |           |         |        |         |     |
|    | 自然が沢山ある               | 友達が近くに住んでいる | 遊び場がある | 近所の人と仲が良い | なんとなく好き | その他の理由で好き | 遊ぶところが少ない | 友達の家が遠い | 店がない   | なんとなく嫌い |     |
| 小5 | 13.68%                | 9.47%       | 4.21%  | 4.21%     |         | 1.5%      | 5.26%     | 1.5%    | 5.26%  | 1.5%    | 19  |
| 小6 | 17.61%                | 7.25%       | 1.4%   | 5.18%     |         | 6.21%     | 9.32%     | 6.21%   | 11.39% | 2.7%    | 28  |
| 中1 | 11.65%                | 4.24%       | 1.6%   | 7.41%     | 4.24%   |           | 7.41%     | 10.59%  | 14.82% |         | 17  |
| 中2 | 8.44%                 | 5.28%       | 2.11%  | 5.28%     | 7.39%   | 2.11%     | 9.50%     | 6.33%   | 14.78% | 4.22%   | 18  |
| 中3 | 12.50%                | 6.25%       | 1.4%   | 12.50%    | 3.13%   | 1.4%      | 14.58%    | 12.50%  | 14.58% | 1.4%    | 24  |
| 不明 | 11.52%                | 4.19%       | 3.14%  | 7.33%     | 7.33%   | 2.10%     | 9.43%     | 7.33%   | 12.57% | 2.10%   | 21  |
| 総計 | 72.57%                | 35.28%      | 12.9%  | 40.31%    | 26.20%  | 12.9%     | 53.42%    | 42.33%  | 70.55% | 10.8%   | 127 |

表 - 9 高野町に関する好き/嫌いの評価の分析 (学年別)

| 学年 | 高野町の好きなおところ/嫌いなおところ |              |         |                       |                       |                |
|----|---------------------|--------------|---------|-----------------------|-----------------------|----------------|
|    | 「好き」の総回答数(a)        | 「嫌い」の総回答数(b) | 回答者数(c) | 一人当たりの「好き」の回答数(d=a/c) | 一人当たりの「嫌い」の回答数(e=b/c) | 「好き/嫌い」比率(d/e) |
| 小5 | 54                  | 21           | 19      | 2.8                   | 1.1                   | 2.6            |
| 小6 | 71                  | 40           | 28      | 2.5                   | 1.4                   | 1.8            |
| 中1 | 51                  | 31           | 17      | 3.0                   | 1.8                   | 1.6            |
| 中2 | 57                  | 42           | 18      | 3.2                   | 2.3                   | 1.4            |
| 中3 | 70                  | 50           | 24      | 2.9                   | 2.1                   | 1.4            |
| 不明 | 61                  | 44           | 21      | 2.9                   | 2.1                   | 1.4            |
| 総計 | 364                 | 228          | 127     | 2.9                   | 1.8                   | 1.6            |

表 - 10 自分の集落の好き/嫌いの評価の分析 (学年別)

| 学年 | 自分の集落の好きなおところ/嫌いなおところ |              |         |                       |                       |                |
|----|-----------------------|--------------|---------|-----------------------|-----------------------|----------------|
|    | 「好き」の総回答数(a)          | 「嫌い」の総回答数(b) | 回答者数(c) | 一人当たりの「好き」の回答数(d=a/c) | 一人当たりの「嫌い」の回答数(e=b/c) | 「好き/嫌い」比率(d/e) |
| 小5 | 31                    | 12           | 19      | 1.6                   | 0.6                   | 2.6            |
| 小6 | 41                    | 29           | 28      | 1.5                   | 1.0                   | 1.4            |
| 中1 | 27                    | 31           | 17      | 1.6                   | 1.8                   | 0.9            |
| 中2 | 29                    | 33           | 18      | 1.6                   | 1.8                   | 0.9            |
| 中3 | 35                    | 41           | 24      | 1.5                   | 1.7                   | 0.9            |
| 不明 | 34                    | 30           | 21      | 1.6                   | 1.4                   | 1.1            |
| 総計 | 197                   | 176          | 127     | 1.6                   | 1.4                   | 1.1            |

表 - 9,10 は高野町と居住する集落に対する、肯定的/否定的評価について分析したものである。2つの表を同時に見ると、肯定的側面の選択数は学年進行に関係なくほぼ一定((d)の項目)であるが、否定的側面については、増加しており((e)の項目)、その増加割合は町全体よりも集落に関する方が大きい。その結果、町と居住する集落を評価するのでは、集落の評価の方がより否定的に現れてくるようである。つまり、その地域が「好き」か「嫌い」と問う時、「嫌い」になる要素を集落の方により多く見出しているのである。表の「好き/嫌い」比率の項目でみると、小5から中3の値は、町全体では2.6から1.4に低下しているのに対して、集落では2.6から0.9に低下している。この要因の一つとして次の点が指摘できよう。集落という地理的に限られた範囲で、中学生になるとより広域の友達付き合いや部活動や遊びを求めるようになる。交通手段が限られている子どもにとっては、地理的な限定性と付き合いや活動をしたい地域との遠隔性により、活動的な子どもほど不便を強いられることになる。

但しこのことは子どものうちは、まだ町域に限られたものである。しかし自動車を利用できる年齢になると、地元付き合いでは集落間の地理的遠隔性はそう問題でなくなり、むしろ就業面などで町自体が都市部からみて縁辺部にあることが主要な問題に変わるのである。

### 5. 子どもの遊び

日常的な遊びを尋ねた結果が表 - 11 である。多くの子どもはテレビゲームやビデオ鑑賞などの屋内の遊び、またスポーツなどを行っている。情報機器の普及に伴い農山村地域、都市地域ともに遊びが同質化してきている現状がよみとれる。学年進行に伴い、小学生の頃は比較的多様性があった遊びの種類が、中学生になると減少していることは当然であるが、農山村地域らしい遊びは小学生に限られているようである。中学生になると学校以外での学習時間が増加すると考えられるが、その余暇にしていることの多くは、前述の3種類が主である。自然条件に恵まれている高野町においてもそれを活かした遊びは比較的少ないといえる。このことは、地域の評価において「自然が豊富であること」を好きな要因に上げてはいるものの、それを十分に体感していないことから、学年進行とともに、それを好きな理由として選択する割合が減少することからも裏付けられる。なお、高野町らしい

表 - 11 子どもの遊び(学年別)

|    | (複数回答, 実数, %) |        |        |        |        |        |       |        |        |              |        |     |
|----|---------------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|--------------|--------|-----|
|    | テレビゲーム        | ビデオ鑑賞  | スポーツ   | ボール遊び  | スキー    | ソリ・雪合戦 | キャンプ  | 川遊び    | 魚釣り    | 虫捕り・木登り・鬼ごっこ | その他    | 総計  |
| 小5 | 12.63%        | 10.53% | 10.53% | 11.58% | 4.21%  | 10.53% | 2.11% | 6.32%  | 1.5%   | 7.37%        | 2.11%  | 19  |
| 小6 | 19.68%        | 11.39% | 14.50% | 11.39% | 7.25%  | 20.71% | 2.7%  | 8.29%  | 5.18%  | 17.61%       | 11.39% | 28  |
| 中1 | 12.71%        | 7.41%  | 5.29%  | 4.24%  | 3.18%  | 3.18%  | 0%    | 2.12%  | 2.12%  | 1.6%         | 1.6%   | 17  |
| 中2 | 7.39%         | 6.33%  | 7.39%  | 1.6%   | 2.11%  | 3.17%  | 0%    | 3.17%  | 1.6%   | 1.6%         | 5.28%  | 18  |
| 中3 | 9.38%         | 8.33%  | 8.33%  | 1.4%   | 1.4%   | 4.17%  | 0%    | 2.8%   | 3.13%  | 1.4%         | 3.13%  | 24  |
| 不明 | 13.62%        | 9.43%  | 9.43%  | 3.14%  | 5.24%  | 6.29%  | 1.5%  | 5.24%  | 6.29%  | 5.24%        | 8.38%  | 21  |
| 総計 | 72.57%        | 51.40% | 53.42% | 31.24% | 22.17% | 46.36% | 5.4%  | 26.20% | 18.14% | 32.25%       | 30.24% | 127 |

特徴としては川遊び・魚釣り及び冬の積雪時の遊び<sup>7</sup>があげられ、ここに地域の自然を体験する機会は残されているといえる。

### 6. 将来の進路

農山村地域の町村では、地元で高校以上の学校がある地域は少ない。中学校卒業後、地域外の高校などに進学し、交通機関の関係上自宅から通学できない場合は、地域外での下宿・アパート暮らしになる。中学卒業後すぐに多くの子どもは一旦は地域外に出ることになる。その後上級学校に進学する場合は当然、就職する場合にも地元に戻ることは稀であると言える。高野町では町内に庄原市に本校をおく高校の分校があるが、分校の生徒数も徐々に減少している。

中学校卒業後の進路についてまとめたものが表 - 12 である。最も多いのが「遠くの学校に行きたい」とするもので半数以上を占める。これは学年進行に伴い自分の進路が明確になってくるとある程度成績重視の学校教育の結果としての進路指導によるものと考えられる。地元の分校への進学を希望するものに限っては、農業への興味がある子どもほどその率が高いが、遠くの学校への進学を希望するものにも、農業への興味がある子どもも、興味がない子どもと同程度の率で含まれている。

表 - 12 将来の進路(学年別, 農業への興味別)

|        |          | (実数, %)       |            |           |         |       |          | 不明 | 総計 |
|--------|----------|---------------|------------|-----------|---------|-------|----------|----|----|
|        |          | 高野町にある分校に行きたい | 遠くの学校に行きたい | 高校に行きたくない | まだわからない | その他   |          |    |    |
| 学年     | 小5       | 4.21%         | 8.42%      | 4.21%     | 1.5%    | 2.11% | 19.100%  |    |    |
|        | 小6       | 2.7%          | 19.68%     | 3.11%     | 4.14%   |       | 28.100%  |    |    |
|        | 中1       | 3.18%         | 7.41%      |           | 6.35%   | 1.6%  | 17.100%  |    |    |
|        | 中2       | 9.50%         | 7.39%      |           | 7.39%   | 2.11% | 18.100%  |    |    |
|        | 中3       | 5.21%         | 14.58%     |           | 1.4%    | 3.13% | 24.100%  |    |    |
|        | 不明       | 2.10%         | 12.57%     |           | 6.29%   | 1.5%  | 21.100%  |    |    |
| 農業への興味 | かなり興味がある | 1.20%         | 3.60%      |           | 1.20%   |       | 5.100%   |    |    |
|        | 少し興味がある  | 4.13%         | 16.53%     | 1.3%      | 5.17%   | 3.10% | 30.100%  |    |    |
|        | あまり興味はない | 7.12%         | 32.55%     | 1.2%      | 15.26%  | 2.3%  | 58.100%  |    |    |
|        | 興味がない    | 2.7%          | 17.57%     | 1.3%      | 7.23%   | 2.7%  | 30.100%  |    |    |
|        | 不明       | 2.50%         | 1.25%      |           |         | 1.25% | 4.100%   |    |    |
| 総計     |          | 16.13%        | 69.54%     | 3.2%      | 28.22%  | 5.4%  | 127.100% |    |    |

就農への意向別に将来の進路をみたものが表 - 13 である。「やってみよう」と回答している子どもは少ないが、「やりたくない」と回答している者に比べて、地元分校への進学意向が僅かに多く、遠くの学校への進学意向は明

表 - 13 将来の進路（就農への意向別）

|                 | 高野町にある分校に行きたい | 遠くの学校に行きたい | 高校に行きたい | まだわからない | その他  | 不明    | 総計       |
|-----------------|---------------|------------|---------|---------|------|-------|----------|
| 面白そうだからやってみよう   | 1             | 2          |         |         |      | 1     | 4        |
| 家が農家だからやってみよう   | 1             |            |         | 2       |      | 1     | 4        |
| 何となくやってみよう      | 2             | 4          |         |         |      | 2     | 8        |
| 食べ物が大切だからやってみよう |               | 1          |         |         |      |       | 1        |
| 自然が好きだからやってみよう  |               | 1          |         |         |      |       | 1        |
| その他の理由でやってみよう   |               | 4          |         | 4       | 1    | 1     | 10       |
| やってみよう全体（小計）    | 4 14%         | 12 43%     | 0       | 6 21%   | 1 4% | 5 18% | 28 100%  |
| 面白くないからやりたくない   | 4             | 23         |         | 6       | 3    |       | 36       |
| しんどそうだからやりたくない  | 2             | 2          |         |         |      |       | 4        |
| 家が農家でないからやりたくない | 1             | 13         |         | 4       | 1    |       | 19       |
| その他の理由でやりたくない   | 3             | 18         | 3       | 12      |      |       | 36       |
| やりたくない全体（小計）    | 10 11%        | 56 59%     | 3 3%    | 22 23%  | 4 4% | 0     | 95 100%  |
| 無回答             | 2             | 1          |         |         |      | 1     | 4        |
| 総計              | 16 13%        | 69 54%     | 3 2%    | 28 22%  | 5 4% | 6 5%  | 127 100% |

らかに少なくなっている。これらのことから、農業への興味、あるいは現時点での遠い将来における就農希望と比較的近い将来の進学先の意思決定はあまり関係ないといえる。

## 7. 保護者の意向

以上は子どもの意向をもとに見てきたが、保護者はどのように考えているのであろうか。数としては少ないが、進学を間近にした中学生の保護者 22 人に尋ねた。

まず子どもが土地家屋など「家産」を継承することに對しては、表 - 14 に示す通りである。「是非継いでほしい」と考える保護者は極めて少なく、「出来れば継いでほしい」と考える保護者が 41%、「子どもの意思に任せる」と考える保護者が 55% であった。保護者の出身地が町内でも（即ち少なくとも親世代から在住の者であっても）、町外でもその傾向は変わらない。子どもの定住を希望する保護者は多いが、その 60% は「出来れば継いでほしい」と答えているが、残り 40% は「子どもの意思に任せる」と答えている。保護者の方にも、地元で定住してほしいが、子どもの意思も尊重したいというジレンマが見られる。

表 - 14 子どもへの家産の引継ぎの希望

| 保護者の属性     | 是非継いでほしい | できれば継いでほしい | 子どもの意思にまかせ | 総計   |
|------------|----------|------------|------------|------|
| 性別         | 父親       | 5          | 4          | 9    |
|            | 母親       | 1          | 4          | 8    |
| 出身地        | 町内       | 6          | 9          | 15   |
|            | 町外       | 1          | 3          | 7    |
| 子どもの定住への希望 | 無回答      |            | 3          | 3    |
|            | 希望する     | 1          | 9          | 15   |
|            | 希望しない    |            | 4          | 4    |
| 総計         | 1        | 9          | 12         | 22   |
|            | 5%       | 41%        | 55%        | 100% |

次に保護者が子どもに定住してほしいと考えているのに、子どもの意思がそれに反した場合の対応について尋ねた結果が表 - 15 である。全体的な傾向としては、「仕方ないので好きにさせる」が 55% と多く、次いで「どちらでも構わない」が 36% であった。子どもに定住を希望し

表 - 15 保護者の子どもへの定住希望が子どもの意志と反した場合

|            | 仕方ないので好きにさせる | 別にどちらでも構わない | 納得をしてでも構わない | その他 | 総計   |
|------------|--------------|-------------|-------------|-----|------|
| 子どもの定住への希望 | 無回答          | 3           |             |     | 3    |
|            | 希望する         | 10          | 3           |     | 15   |
|            | 希望しない        | 2           | 2           |     | 4    |
| 家産の引継ぎ     | 是非継いでほしい     | 1           |             |     | 1    |
|            | できれば継いでほしい   | 7           |             |     | 9    |
|            | 子どもの意思にまかせ   | 4           | 8           |     | 12   |
| 総計         | 12           | 8           | 0           | 2   | 22   |
|            | 55%          | 36%         | 0%          | 9%  | 100% |

ている保護者のうち、3分の2が「仕方ないので好きにさせる」と消極的であるが子どもの意思を尊重した回答になっている。

また子どもの進学に関する希望については、表 - 16 にまとめた。最も多い回答は「本人の好きにさせる」で 50%、次いで「町内の分校に行ってもらいたい」が 23%、「どこでもよいので高校には行ってほしい」が 18% であった。地元の分校に行ってもらいたいという保護者の多くは、子どもに地元での定住を希望しているということがわかる。しかし家産を継いでほしいという保護者は、必ずしも地元分校への進学を考えておらず、本人の意思を尊重するという意向である。このことから、土地家屋の継承よりも近くに子どもを置きたい保護者が多く、また進学については、本人の意思を尊重する傾向が強いと言える。

表 - 16 子どもへの進学について

|            | どこでもよいので高校には行ってほしい | 町内の分校に行ってもらいたい | 他の市町村の高校に行ってもらいたい | 他の市町村の進学校に行ってもらいたい | 本人の好きにさせる | 総計   |
|------------|--------------------|----------------|-------------------|--------------------|-----------|------|
| 子どもの定住への希望 | 無回答                | 1              |                   |                    | 2         | 3    |
|            | 希望する               | 1              | 4                 |                    | 9         | 15   |
|            | 希望しない              | 3              |                   | 1                  |           | 4    |
| 家産の引継ぎ     | 是非継いでほしい           |                |                   |                    | 1         | 1    |
|            | できれば継いでほしい         |                | 2                 |                    | 6         | 9    |
|            | 子どもの意思にまかせ         | 4              | 3                 | 1                  | 4         | 12   |
| 総計         | 4                  | 5              | 1                 | 1                  | 11        | 22   |
|            | 18%                | 23%            | 5%                | 5%                 | 50%       | 100% |

最後に、学校教育に対する要望を複数回答で尋ねた。その結果は表 - 17 である。最も多い回答は「個性を伸ばしてほしい」82%、次いで「学力のレベルアップ」23%、「地元に関する勉強」18%、「町外等の子どもの交流」14% であった。多くの保護者は個性を伸ばす教育を求めているが、その個性には多くの属性が含まれる。それは子ども個人個人に応じた学力、スポーツ能力、特別な技

表 - 17 今の学校教育についてどう感じるか

|                     | 人数 | 構成比  |
|---------------------|----|------|
| 今のままでよい             | 0  | 0%   |
| もっと地元についての勉強をさせてほしい | 4  | 18%  |
| 一層の学力レベルアップをはかってほしい | 5  | 23%  |
| 子どもの個性を伸ばしてほしい      | 18 | 82%  |
| 町外、他県の子とも達と交流させてほしい | 3  | 14%  |
| 遊ぶ時間を増やしてほしい        | 0  | 0%   |
| その他                 | 2  | 9%   |
| 回答者                 | 22 | 100% |



術や技能，一般的に言えば才能であろう。現在の学校教育に対して保護者はより多様な教育や才能開花の機会を求めていると言うことになる。また，地元に関する勉強も現在の学校教育では不十分であることをも指摘している保護者もいる。

## 8. アンケート調査のまとめ

以上，子どもの意向調査とそれに対応する形で保護者の意向調査をもとに検討してきたが，これらをまとめると次のような諸点が指摘できる。

①子どもは保護者とその職業に対する敬愛と親近感，地元や農業に対する愛着と肯定的評価をもっているが，それはとくに小学生について特徴的である。

②しかし，中学生になり，友人付き合いや活動の幅が広がり，また地元社会や農業・農村の現状について客観的に理解できるようになると，小学生の頃の肯定的評価の要因は，むしろ否定的評価に変わる。とくに交通手段をもたないので，地域の交通面や生活条件（とくに子どもたちの現代的な溜まり場の無さ等）の不便さを指摘するようになる。

③また将来の就農に対しては消極的であるが，農村と言う社会の中での共通認識・世間的常識の中で育ってきたため，農業や農業者に対する評価（それは建前の評価と言うことも十分にありうる）は決して低くはない。

④進学に関しては，地元の分校よりも本校が遠くの高校への希望が強い。

⑤一方，保護者は子どもが地元で定住することを希望しているが，地元での生活条件や農林業の低迷等の要因から家や家産を継いで欲しいと強い希望を持っているわけではない。将来の進路に対して，子どもの意志を尊重しながら対応しようと考えている。

⑥従って保護者の意向については，子どもの定住を希望しているが，定住しても就業の場がかなり限られ，農業への従事にしても自分たちの体験から積極的に子どもに継がせる事は困難であろうと考えている。このような条件により，さらにかつてに比べ子どもの意思を尊重する傾向が強まっており，農山村地域の保護者自身はより一層，子どもに強く定住を要請できないのである。

## IV. 子ども意識と地域振興課題

先にアンケート調査によって子ども意識と保護者意識の状況について検討してきた。そこから垣間見られるのは，子どもも保護者も，農山村地域にあっても農山村に

対して明確な将来のビジョンを描けるわけではなくまた意識も地域に収斂するものでもない。いわば意識や将来ビジョンは地域から拡散しつつあるといえる。もちろん，これらの状況は当該の子どもと保護者だけの問題でも責任でもない。現在の農山村をめぐる社会経済情勢からの価値観が二つに分裂<sup>8</sup>していることに起因するのである。つまり，人間らしい生活の場として考えれば農山村は理想的な場として選択されるかも知れないが，現実問題としてそこに生活しようとするれば，地域の資源を利用し国際競争をも考慮しながら最低限の所得が確保できる産業を再編しなければならないのである。その場合，経済的に見て後者が極めて困難になっているから，近未来の農山村のビジョンが描けないのである。

### 1. 地域振興課題の多様化とその担い手

今後の農山村地域振興を考えると，多くの課題に直面する。現在各町村で取り組まれている町村興しは，最終的には地域住民の安定的定住と福利の向上を目指したものであるが，農林業を中心にした産業振興，農林等資源を利用した観光・交流推進，地域内の福祉等を重視した定住条件整備などで多様である。近年の特徴としては産業としての農林業の地位の低下に伴い，直接的な農林業振興を町村興しの中心に据えることは少なくなり，観光・交流事業や地域住民相互の福利活動を通じた間接的な，しかもレジャーやホビータン的な要素，あるいは生き甲斐づくりとしての農林業振興が多くなっていると考えられる。これは，農林業を直接的に担える担い手の減少に伴った必然的な対応であると思われる。

このような状況のもとで，今後農山村地域で求められる後継者像も変化しつつあると思われる。それは在村する保護者や祖父母世代も，将来の後継者になりうる子どもたち自身も意識しないうちに変質してきたのである。

図-4はその諸関係を整理したものである。過疎化以前は，多くの若年労働力の存在など当時の農山村の社会経済状況と農林業の国民経済に占める地位の高さ，一定程度の所得確保が可能等の条件を反映して，農林家の後継者は，農林業の担い手であったし，産業以外の地域活動の担い手でもあった。僅かの例外はあったにせよ，これら3種の担い手はほぼ同じであったと言える。

それが現在においては，かなりの分裂がみられる。図では，農業の後継者が最も小さな枠組みで描かれているが，これも在村の農家の後継者とIターン等で移住してきた新しい担い手によるものである。在村の農家後継者も学卒以来在村の場合と一旦都市部で就職して何らか

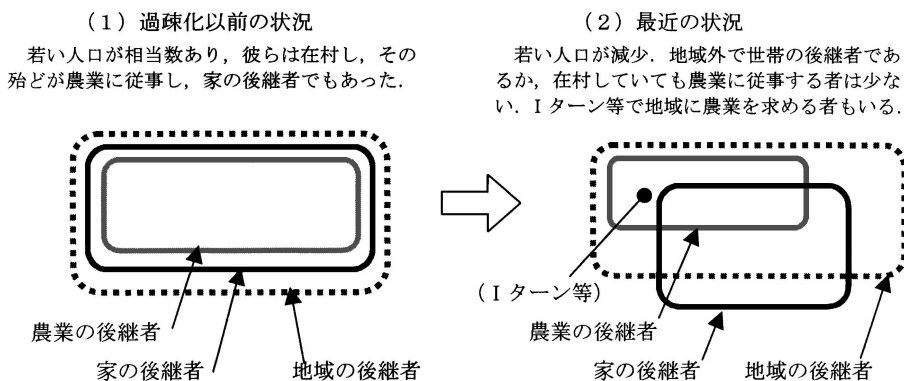


図-4 農山村地域における「後継者」の諸関係

の契機によってUターンしてきた場合に分けられる<sup>9</sup>。また農家の後継者<sup>10</sup>は、在村の場合もあるが、地域外（地方中核都市や大都市）で家の後継ぎとなっている場合も多くなっていると考えられる。従って、農林業とそれ以外の地域活動あるいは持続可能な地域を維持するための人口要素としての地域の後継者は相当に減少していると考えられるのである。

そして、農山村で最も必要なものは地域の後継者であろう。なぜならば、地域を如何なる形で存続させるにしてもそこに後継者がいないと人口の再生産が出来ないからである。その意味で、地域の後継者候補の子ども達の意向と地域としての条件整備は極めて重要であると考えられる。

## 2. 子ども意識と地域振興課題

では子ども達の意識や意向は如何にして作られたのであろうか。子どもの地域意識の形成と保護者の関わりについて、アンケートから検討してみると次の様になるであろう。

図-5はアンケート結果から読み取れる要因を整理し、子ども意識の形成要因を発達段階に分けて示したものである。多くの子どもは幼児や小学生の頃は、自分の比較的狭い範囲の生活環境をそのまま受け入れて、農山村の自然環境や農林業など地域の生業、保護者の職業に対して肯定的な評価をしている。

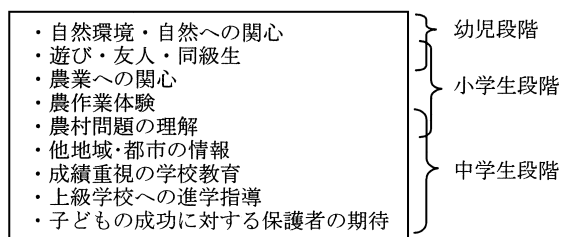


図-5 農山村地域における子ども意識の形成要因

それが小学生から中学生にかけて農山村や農林業に対する理解と地元で見聞きする現状認識が深まり、学校教育での客観的事実の情報伝達により、全面的肯定から条件付肯定へと評価が変化するように考えられる。ここでの条件とは自分の関心・興味を満たすものがそこにあるかどうか、あるいは生活をする上での就業所得など経済的要因、

また農山村に居住し農林業に従事する自分の姿が他者にはどう映るかという点であろう。このような認識変化に加え、成績重視による学校教育・進学指導の方針、学歴重視社会における保護者の期待などが、先の条件付肯定の幅をさらに縮小させることになるのであろう。即ち、ある意味では子ども達の地域に対する思いを、教育と保護者の期待が地域から遠ざけていることになる。しかし、現状の農山村地域では子ども達の進学や興味・関心に合う就業先の希望を叶えることは出来ないのである。

この困難な問題解決への糸口としてUターン者に着目する必要がある。彼らは地元の出身で学卒後、一旦は都市部に居住しそこで就業していたので、農山村と都市の両地域の長所も短所も知った上で、農山村を選んだことになる。彼らが農山村を定住の場と定めた契機は、在村の親の事情に関わる場合や自ら選択した場合など様々であろうが、Uターン行動をとらせたその背景には、故郷に対する帰属意識が多少とも存在したと考えられる。帰属意識は子どもの頃の地域での様々な良い体験に基づいて形成され、とくに重要な要因は地域の一員であることへの自己認識であり、また周囲からも地域の一員であると認識されること（外部評価）でもある。これらの相互認識によって意識の底流に帰属意識が形成されると考えられる。

現在のUターン者は30~40歳代が中心であるが、彼らの子ども時代は現在よりも子ども数（同級生や友人の数）が多く、生活環境等では不便ではあったが、それを相殺する以上の良い体験を重ねていると思われ、それが帰属意識に結びついていると考えられる。この帰属意識の存在は、進学や就職で一旦は地域外に出ても、再び農山村地域に戻る強い原動力になると思われる。それに比べると現在では子ども数の減少に伴い、生活条件の不便さ・不満の方が強く子どもの意識形成に関わっているようである。

従って、現在の子もたちの地域への帰属意識を形成することを助長する体制と意識を地域在住の保護者や学校は持っていなければならないだろう。農山村に存在しない上級学校や若いうちの就業先は都市部に依存しても、ある段階から再び農山村に定住できるような、子どもの時代からのメンタルな条件づくりが必要であり、これが新たな地域振興課題として認識されねばならない。

同時に、現在の在村者を安定定住させ、将来Uターンを促進するための物的な条件整備も進めていく必要がある。現在のUターン者はやはり兼業農業で生計を立てている場合が多い。それは農林業だけでは十分な所得を得られないことによるが、農山村にあっても農林業だけが主たる産業でもない。様々な産業と職種があって、即ち職業選択が可能であればこそ多様な担い手が居住出来るのである。アンケート結果からも明白に言えるが、現在の定住の妨げになる問題は、職業選択の幅が限られていることで、農山村で将来においても定住することに明確なビジョン、将来設計が描けないことである。

## おわりに

現在の農山村地域の問題は、一般的にいえば結局、選択幅の減少あるいは制約ということになる。それは、子どもも保護者も同様に影響を受けている。限られたあるいはかつてより劣悪化した生活環境による生活パターン、行動パターンの制約であり、職業選択や所得機会の制約、さらに進路選択では進学先や学校教育の制約がある。これら選択幅の減少・制約の改善は現状をみると直ちに改善できる性格のものではないが、長期的に改善していかなければならない。その際、経済効率を重視する農林業をはじめとする地域産業振興の既定路線の他に、地域資源を利用しながら新たな価値観を見出すような地域産業振興も構想されねばならない。

地域の後継者として子ども達が当該地域を選択し、地域の人口を維持出来るようにするには、学校教育や一定の就業期間が終了した後、地域に戻れる物的な就業条件の整備と、個人個人の地域への思いや帰属意識を育むための地域ぐるみでの体制づくりが必要であろう。それは短期的な問題解決のための対症療法ではなく、長期的な将来ビジョンと地域理念に基づく長期的な地域戦略である。

本論は、平成13年度島根大学生物資源科学部卒業論文『農山村地域の子ども意識からみた地域振興への課題』渡辺絵美をもとに、全面的に再構成したものである。な

お、アンケート集計表の原資料は渡辺による。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、ヒアリング調査、アンケート調査等で、高野町役場・高野町教育委員会、町内各小・中学校の校長先生、児童・生徒、保護者の方々、さらに町内農家等多くの方々に、専攻生渡辺ともども大変お世話になりました。記してあつく御礼を申し上げます。

## 注

1：農業地域区分に基づく中山間地域という表現が現在一般的になりつつあるが、ここではあえて、従来の産業・地理的地帯区分に基づき農山村地域と呼ぶことにする。実際的には殆ど重なるが、この方が、地域の置かれている社会経済的条件と地理的条件に基づく過疎と少子高齢化の実態を的確に示すことになるからである。

2：これは現代の貧困による人口流出といえる。地元の学校に子どもが通っている間は、地元での兼業農業など多くの所得手段を組み合わせる生活が成り立っていた。しかし、通学出来ないほど離れた高校に入学することになると、下宿等に関わる仕送りが必要になり、地元にある所得機会だけではまかなえなくなる。そのため、一家で高校のある町に転居し世帯主もそこで職を求めることになる。教育機会の平等という観点からみると、生活の場の条件不利性が教育費用を増大させ、個人レベルでそれに対応せざるを得ないという状況を作り出している。

3：所得水準の高低と言う時、一般的な基準は決めにくく、その時代の地域の社会経済的状況下の支出水準による。農山村の場合都市部に比較すると絶対的には少ない。しかし都市に比較して支出水準は低いいため、決して貧困を意味するわけではない。むしろ、都市より豊かな生活をしている場合が良く見られる。

4：人口減少と世代構成を峻別して考える必要がある。人口の自然減とは高齢者世代の比率が多くなり地域としての人口再生産構造を喪失することである。当然それは家や農業の担い手問題以上に深刻な、地域の存亡に関わるものである。

5：子どもを対象とするアンケートであるので、厳密な意味での漢語表現は難しいので、質問票の表現は「農業をやってみたい」、「やりたくない」というやや曖昧なものである。従って、その答えも確固とした就農や非就農の意思ではなく漠然とした現時点での希望程度のもので

あることに注意する必要がある。ただ逆に見れば現時点での希望は将来十分変わり得るといふ弾力性ももっていると思われる。

6：「食べ物を作っているのが偉い」という選択肢は本来適当ではない。ここには有無を言わさぬ価値判断を強制する可能性がある。また農村においては子どもたちは農業・農業者に対して家庭でも学校でもある種の規範を教え込まれていると考えられる。これらから、この選択肢を選んだ理由は全く個人的ではなく、農村という世間の中で子どもなりの判断が含まれていると考えられるので、実際は多少割り引いて考える必要がある。

7：高野町では冬季の積雪を地域興しの一手段として、「公式雪合戦」イベントを企画し地域内外から多くの参加者を集めている。このことが子ども達の遊びにも影響し、表のような結果が出たものと思われる。

8：時代のパラダイムと価値観は、高度経済成長を境に大きく変化した。生産性は低かったが、多くの人口を抱え、先祖から伝えられた土地を遊休化することなく利用し、農林牧畜の複合経営と農地山林での資源循環と自給性の高い伝統的な農林業形態とその価値観は、金員価値に基づく経済効率至上主義的な価値観に大きく変化した。この間、生産性と現金収入の増大のため農山村が流出し過疎が生み出された。現在の保護者世代は昭和30年代以降の世代であるから、このような価値観の真っ只中で育ってきた。それゆえ典型的に描けば、農山村よりも都市、農業よりも第二次・第三次産業、農作業の技術・技能よりも勉強・学業成績、自分が実現できなかったことを子どもに期待する、という価値観と行動様式を持つことが多いのではないと思われる。石油ショック以降は、経済効率至上主義によって発生した、公害問題、地球環境問題により、環境主義あるいは自己実現主義といった新しい価値観が生まれる一方で、WTO体制や経済のグロー

バル化によりあらゆる産業が国際競争に直面することになったため経済効率至上主義の一層の強化が進んでいる。いわば現在社会は、二つの価値観の狭間で動揺しており、それは農山村においても同様である。つまりIターンで農山村に移住し農林業に従事する者もいる一方で、農業面で一層の規模拡大と効率化を図りコストダウンを志向する傾向も強いのである。

9：学卒以来の在村者とUターン者の場合では、農林業や農山村に関してのメンタリティーは異なるであろう。後者の場合のメンタリティーはIターンによる新住民のそれと近いと考えられ、農林業に従事する態度や進取の気風は相当な差があると思われる。

10：この場合、農家の後継者とは家の後とりの意味である。つまり「家系」の後継者ではあるが、農地・山林・住宅など家産をも引き継いだ（つまり故郷に在住するか故郷に片足を残した）後継者であるとは限らない。

## 参 考 文 献

- 1：内山節『山里紀行 - 山里の釣りからⅡ - 』1990，日本経済評論社
- 2：内山節「山村でいま何が起きているか」(大内力編著『中山間地域対策』所収)14-31，1993，農林統計協会
- 3：中国新聞社『中国山地(上・下)』1967，同『新・中国山地』1986，未来社
- 4：中国新聞社『中国山地 - 明日へのシナリオ - 』(中国新聞連載中)2002
- 5：池上甲一「初等教育の中の農業と総合学習」(祖田修・大原興太郎編著『現代日本の農業観 - その現実と展望 - 』所収)293-305，1994，富民協会
- 6：渡辺絵美『農山村地域の子ども意識からみた地域振興への課題』島根大学生物資源科学部卒業論文2002